

日本におけるアスレティック・トレーニングの発展と展望

白 木 仁

(筑筑波大学体育科学系)

わが国において、アスレティックトレーナーという言葉はある程度市民権を得ているが、アスレティック・トレーニングという用語は、なじみの浅い言葉である。本来アスレティックトレーナーの発祥の地である米国では、アスレティックトレーナーの活動内容に関する知識・技術をアスレティック・トレーニングといい、この内容を習得し試験に合格したものが、公認のアスレティックトレーナーとなり、ATCという。この内容には、1) スポーツ傷害の予防、2) スポーツ傷害の認知評価と救急処置、3) スポーツ傷害のアスレックリハビリテーションとリコンディショニング、4) スポーツ選手の健康管理について、あらゆる角度からの選手への訓練指導などがある。すなわち、アスレック・トレーニングとは、アスレックトレーナーになるための実践学問のことであると理解できよう。

ここでは、わが国におけるアスレック・トレーニングの実践者であるアスレックトレーナーの現状を踏まえた上で日本におけるアスレック・トレーニングの発展と展望について考えてみることにする。

わが国におけるアスレックトレーナーの活動内容としては、スポーツ傷害の処置と、テーピング、マッサージ、アスレックリハビリテーションなどの活動に限定され、上に挙げた米国のアスレック・トレーニングの内容の活動が十分に行われているわけではない。

その理由には、次のことが挙げられる。

1) スポーツの現場においては、コーチ・選手などからアスレックトレーナーに要求されることは、主として、スポーツ傷害の処置、テーピングやマッサージになることがほとんどであり、コーチのアスレックトレーナーに対する信頼性は低い。米国でアスレックトレーナーの資格を取得したのものにとっては少々不満の残るものとなっている。

2) 日本体育協会のアスレックトレーナー制度における教育プログラムは、米国のアスレック

・トレーニングのものを参考に作成されている。しかしながら、実際の現場では、この内容が十分に適合しているものとはいえない。

3) 日本においては、医療資格が複雑に絡み、米国でアスレック・トレーニングの内容を現場で実施することには法的に認められていないこともある。日本で活動するには、米国のATCを取得した者が、日本の医療資格を取得しなおしてアスレックトレーナーの活動の幅を広めて活躍している場合もある。

以上の理由から実際のスポーツ現場で活躍しているアスレックトレーナーは、様々な特色を持ち活躍している。例えば、アメフトやラグビーなどの球技あるいは、柔道などの対人競技では、主としてスポーツ傷害の救急処置やテーピングを行い、陸上競技や競泳、スピードスケートなどの個人種目では、主としてマッサージや体力トレーニング(コンディショニングトレーニング)を行っている。さらにアスレックトレーナーの取得している医療資格の種類(PT、鍼灸師、柔整師など)によってその活動内容に治療行為も含めている。このように日本で活躍しているアスレックトレーナーは、アスレック・トレーニングの習得をした上で、日本特有の医療資格の制約のもとで、アスレックトレーナー活動を行い、選手の体調の管理をしてい

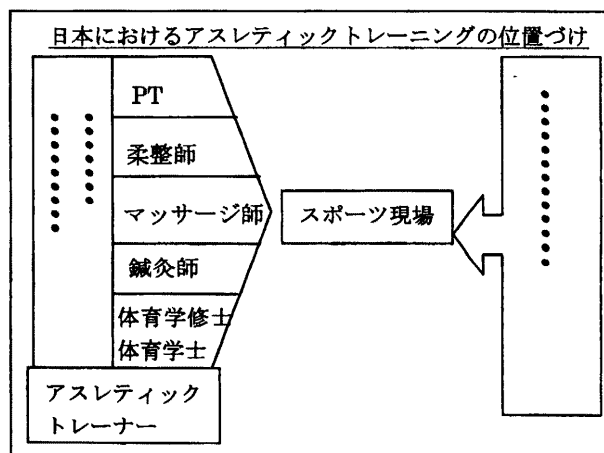


図1

る（図1参照）。

従って、日本におけるアスレティック・トレーニングの発展と展望は、米国を参考にしたアスレティック・トレーニングの教育が大学、専門学校等で行われ、習得した者が何らかの医療資格を取得し、様々

なスポーツ種目の現場で求められる内容のアスレティックトレーナー活動が実施されていく中から、日本のスポーツ現場に適応した内容のアスレティック・トレーニングが構築されていくものであり、現在はその発展の途上にあるものと考えられよう。